東北大学東北アジア研究センター ニューズレター

CNEAS

newsletter

Center for Northeast Asian Studies

89

2021
Summer

巻頭言

東北アジア研究センターのこれから

千葉聡（センター長、教授）

まさかこの4月からセンター長に就任することになるとは、まったく想定していなかったので、いろいろと準備不足、情報不足でセンター員の皆様にはお手数をおかけしているが、皆様のご協力のおかげで、なんとか新体制を始動でき、深く感謝する次第である。また高倉前センター長には、さまざまにご助言、ご支援をいただいて、たいへん心強く、またありがたく感じている。

さて我がセンターであるが、先だっての第3期中期目標期間の評価報告で、成果について非常に高い評価をいただくなど、順調にその存在感を発揮しつつある状況だ、と私は認識している。これはセンター員の皆様のご活躍と、これまで務められたセンター長の方々のご尽力の賜物であるが、これを維持し、かつ発展させていくのは、これからのセンターにとって最も重要なことだと考えている。

最近、他の部局の方から、東北アジア研究センターには色々な研究分野があり、様々な研究が行われていて面白い、という話をよく聞かされる。これは研究に関する分野、成果、個々人の関心の在りかの多様性が、センターの強みのひとつだということを表している。一方、こんな発言を、やはりほかの部局の方から聞いている—東北アジア研究センターで、こんな面白い研究が行われているとは知らなかった。—褒められているように見えるのだが、一方で実はこれは、私たちの組織が、ポテンシャルある多様なコンテンツを持っているにもかかわらず、その強みを外部に向けてまだ十分にアピールできていない、ということを示しているとも言える。

今後は、これまでの強みを生かしつつ、センターとしての大型研究企画を積極的に展開していく必要があるだろう。それぞれの努力の結果、大型プロジェクトはずいぶん出るようになったが、センターとしての事業も今後発展させていきたいところである。特に将来性あるものとして、高倉前センター長が起動した地域研究デジタルアーカイブは、センター全体が関わることのできる事業である上、大学本部や外部からの期待も大きく、たいへん有望である。

とはいえ大学を取り巻く環境は厳しい。センターもいくつもの難題に直面しており、いまの状態を維持するには、かなりの工夫が必要なことも確かである。またコロナ禍で研究教育にさまざまな支障が出ていて、今後の予測も難しい状況である。私たちの期待に反して、今後さらにいろいろと不都合な問題が発生するかもしれない。しかし、何事も前向きに、可能な限り楽天的に取り組んで、少しでも元気が出るような形で解決できればと思っている。

contents

1 巻頭言
2 私の東北アジア研究
3 最近の研究会・シンポジウム報告
4 新任ごあいさつ
6 著書・論文紹介
7 共同研究の紹介
8 活動風景

TOHOKU UNIVERSITY

私の東北アジア研究

パンデミック下でのオンライン集会

堀内香里　情報拠点分野／学術研究員

今年1月から3月に開催したモンゴル史関連の会議について報告する。前回のニューズレターに掲載したように、昨年12月に講演会「清代モンゴル史研究の最前線」を開催したが、これに続いて今年1月23日に講演会「古代・中世ユーラシア研究の今」、3月13日に講演会「20世紀モンゴル史研究の現在」をいずれもオンラインで開いた。各回、第一線で活躍するモンゴル人研究者3名が講演し、それら全てを日本語に通訳した。これによって、古代から20世紀までのモンゴリアの歴史について最新の研究成果を日本に紹介できた。以下、1月と3月の講演会の内容を簡単に紹介する。

1月開催の「古代・中世ユーラシア研究の今」の一件目はR.ムンフトルガ先生が「古代テュルク大属の埋葬施設に関する諸課題について」と題して、突厥の埋葬施設の構造やその特徴について考古学資料の分析に基づいて講演した。二件目はS.ウルジーバヤル先生が「ハタニー・ボラグの周辺で発見された時代の異なる3つの墳墓について：9-10世紀・13世紀・15-16世紀」というタイトルでモンゴル国ドルノゴビ県ハタンボラク村で発掘された異時代の複数の墳墓について、その相違や遺物を説明しながら論じた。最後はD.アンハバヤル先生の「イルハーン国におけるワズィールの組織体系とその特徴」で、13-15世紀のペルシアやアラビア語史料の分析に基づくもので、イルハーン国の役人組織に関する世界最新の研究報告である。

3月開催の「20世紀モンゴル史研究の現在」でも世界初となる研究成果が発表された。一件目はZ.ロンジド先生が「モンゴル政府の財政・金融政策：1921年2月22日から7月10日」と題して、当時発行されたモンゴルの紙幣がモンゴル国内外でどのように扱われたのか、またその経済政策について講演した。続いてN.バトボルド氏が「モンゴル最後のザサクたちの運命：1921-1937年」と題して、有力貴族たちが社会主義政権下で如何なる最期を迎えたのかについて具体事例を用いて紹介した。最後はCh.ボルドバータル先生が「モンゴル人民共和国憲法史：1949-1960年」という題目で、1949年の憲法改正案は「新憲法」と見做すべきであることを複数の根拠を提示しながら論じた。このように、当該講演会シリーズではモンゴル人研究者らによる世界最前線のモンゴル史研究が発表され、新型感染症によって滞っていた学術交流が行えたほか一般の方にもモンゴル史を知ってもらう機会となった。

2021年2月20日開催の研究会「ユーラシア遊牧民の地図史」のポスター

こうした講演会とは別に、2月20日に研究会「ユーラシア遊牧民の地図史」をオンラインで開催した。これは私が代表する同名の本センター共同研究の成果報告会で、広く研究者に公開した。当初の予定を変更し次の3件の報告となった。小沼孝博先生は「天山を越えて：ムザルト峠とその役割」と題して、商人らが命がけで通行していたムザルト峠の歴史的役割について、Ts.ジャムバルドルジ氏は「ジュンガルのアンギについて：フブン・ノヤン」というタイトルで、18世紀ジュンガルのアンギと呼ばれる組織についてそれぞれ発表した。また私も「清代モンゴルの地図：その作成方法と目的の変遷」と題して、清朝によるモンゴル統治の枠組みで理解されてきたモンゴル地図について、モンゴル人にとっての必要性をその統治手法の性質から論じた。この共同研究は単年のものであり、新型コロナウイルスのために史料調査がままならず地図史について真正面から考察することは困難ではあったが、空間利用や空間認知について同時代の隣接する地域間での比較を行うことができた。

昨年12月から数えれば3月までの4か月で4本の集会を開催できた。長引くパンデミックでなかなか身動きの取れない中、オンラインという場所を選ばない方法によって却って国際学術交流を容易に行うことができたことは僥倖といえよう。

ほりうち・かおり　2020年3月、東北大学大学院環境科学研究科にて博士（学術）学位取得。研究テーマは清代モンゴルの社会史。

シンポジウム

Urbanism in the Age of COVID-19: Towards an Inclusive and Resilient Society

滕媛媛
（情報拠点分野／助教）

会期 2021 年 3 月 20 日～3 月 21 日
会場 オンライン開催

新型コロナウイルス感染症の流行は、現在の世界が国境を越えて対処すべき社会経済的、健康福祉・保健医療上の最大の課題である。新型コロナが都市や社会にいかなる影響を与え、社会がどのように対処してきたか、また、包摂的かつ強靭な都市と社会を構築するために個別学問領域を越える対応がどのようにあるべきか、について考える国際若手シンポジウムを企画した。

シンポジウムのポスター

初日のセッション「コロナ禍の日中都市と社会」では、ジュネーブ大学名誉教授の Roderick Lawrence 先生を招き、コロナ時代における都市の健康とレジリエンスについて講演していただいた（動画は東北大学 YouTube チャンネルにて公開）。また、新型コロナの最初の流行地である中国から、南京師範大学、華中師範大学、香港理工大学の若手研究者を招聘し、東北大学の若手研究者とともにコロナ時代における日中都市と社会の在り方について多角的な議論を行った。二日目のセッション「コロナ禍の社会的影響と福祉支援」では、日本社会に焦点を移し、研究者だけでなく実務家や行政からも報告者やパネリストを募り、コロナ禍が日本社会に及ぼす影響とその対応について、多様な立場からの報告および討論を行った。シンポジウムは国内外の研究者や実務家から多くの関心を集め、7 ヵ国から 105 名の申込み、87 名の参加者を得て、活発な質疑が行われた。

研究会

第 4 回「中央ユーラシアのムスリムと家族・規範」研究会

磯貝真澄
（ロシア・シベリア研究分野／助教）

会期 2021 年 2 月 8 日
会場 オンライン（Zoom）

地域研究の課題に、越境をともなう人やモノの移動で生じる地域コミュニティの変化の様相を明らかにするというものがある。「中央ユーラシアのムスリムと家族・規範」研究会を開催する共同研究グループの目的の一つは、中央ユーラシアのムスリム社会における、家族にまつわる規範の越境的展開の過程を跡付け、国境を超える人の繋がり、言説の連関の様相を解明することである。国内外から 29 名の参加者を得た第 4 回研究会では、まず佐々木紳氏（成蹊大学）が「アフメト・ミドハトとファトマ・アリイェ：あるいはハイブリッドな評伝の虚実」と題し、オスマン帝国のジャーナリストであるアフメト・ミドハトと女性作家ファトマ・アリイェをめぐる歴史的事実を明らかにした。帯谷知可氏（京都大学）が、ロシアのムスリムをめぐる言論界とファトマの関係を指摘し、今後の共同研究の展開について認識が共有された。

和崎聖日氏（中部大学）とアドハムジョン・アシロフ氏（ウズベキスタン科学アカデミー歴史研究所）は、ウズベキスタンのフェルガナ地方のイスラーム聖者廟で行われる女性の祝祭を調査し、民族誌映画を制作した。研究会では、その『グリ・アルムガーン：ウズベキスタンの女性たちによるイスラーム儀礼』を上映し、解説するという手法で成果公開を行った。参加者による映画鑑賞には、YouTube の限定公開の機能を利用した。筆者には、非常に美しい映像の中で、男性たちが女性たちの祝祭の食事のために立ち働く姿が印象に残った。なお、この映画は「英国王立人類学協会民族誌映画祭 2021」（2021 年 3 月 19 ～ 28 日）で入選し、上映された。

民族誌映画『グリ・アルムガーン』のワンシーン

研究会

災害人文学研究フォーラム「記憶する、伝える、繋げる－災害伝承における多様性と男女共同参画」

李善姫
（災害人文学研究ユニット／助教）

会期 2021 年 2 月 27 日
会場 オンライン開催

さる 2 月 27 日、東北アジア研究センター内の研究ユニット「災害人文学」では、東日本大震災から 10 年という時期に被災地の災害伝承に関する研究フォーラムを開催した。テーマは、災害伝承における多様性と男女共同参画。第 3 回世界防災会議で採択された「仙台防災枠組」では、女性を含む多様な主体が防災や復興に参画する必要性が示され、国内でも多様な視点からなる復興の重要性が広く認識されるようになっている。そのような指針は伝承館の展示にどのように活かされているのかを検証し、被災地で震災の記憶を伝え続けている女性たちの生の声を聞くというのが本研究会の趣旨であった。

第 1 部では「災害人文学」のメンバーで構成された「災害とジェンダー・多様性」研究チームの小川真理子（本学男女共同参画センター）准教授より、チームが行った岩手と宮城の 4 つの伝承館での視察報告を行い、第 2 部では災害を伝える女性たちを交えたパネルディスカッションが行われた。当日、パネリストとしては、「冨岡 3・11 を語る会」の田中美奈子さん、石巻で女性の被災体験をまとめた千葉直美さん、岩手県陸前高田市「ハナミズキのみちの会」の淺沼ミキ子さん、「おらが大槌夢広場」の岩間敬子さんが登壇し、震災時の女性として母としての体験を語った。パネリスト達は、これまでどのように伝承活動に参加してきたのか、10 年の間でどのような成果と課題があるのかなどの議論を行った。

被災地で災害の経験を伝えている女性たち

本センター・
伊達市噴火湾文化研究所
第 10 回学術交流連携講演会

人の営みと自然

後藤章夫
（地球化学研究分野／助教）

会期 2021 年 2 月 12 日公開　会場 オンライン開催

表記講演会が 2 月 12 日にオンラインで公開された。 2019 年 10 月は台風で、2020 年 3 月はコロナ禍でそれぞれ中止となり、対面開催が依然難しい中で、本センター初となるオンライン講演会の形を取った。講師は本センターの佐野勝宏教授と伊達市噴火湾文化研究所の永谷幸人学芸員で、それぞれ「気候変動と人類史」、「北海道有珠地区における 17 世紀のアイヌの生活と災害」と題して講演が行われた。現在も公開中なので是非ご覧頂きたい。

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2020/renkei_10th.html

新任ごあいさつ
NEW FACULTY & POSTDOCS

#1

ANWER SAYED
ABDELHAMEED AHMED
資源環境科学研究分野／助教

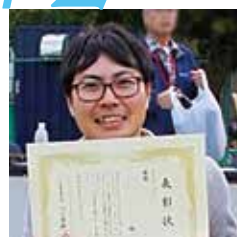
アンワー・セイド・アブデルハミード・アハメド▶エジプト出身。エジプト日本科学技術大学(E-JUST)修了。博士(Ph.D)。2019 年 1 月　本センター研究員。2021 年 4 月～　同助教。

電磁波による遺跡調査

私の専門は、リモートセンシングシステムの設計・開発・応用であり、現在エジプト・ギザの大ピラミッドの巨大な構造を可視化する新しい低周波レーダシステムを開発しています。既にプロトタイプを試作しエジプトで多くの実験を行い、性能向上のための開発を続けています。 私が行っているもう 1 つの研究は、新しい MIMO- 地表設置型合成開口レーダ（GB-SAR）の開発です。多入力多出力（MIMO）技術に基づく新システムは、小型、軽量、高速の機能を実現できます。 また日本全国各地で地中レーダー（GPR）や地上設置型合成開口レーダ（GB-SAR）を利用した実験にも参加しています。

#2

リモートセンシング × 自動走行の可能性



齋藤龍真

資源環境科学研究分野／学術研究員

さいとう・りゅうま▶山形県出身。2009年仙台電波高等専門学校（現仙台高等専門学校）卒、2013年山形大学大学院修了、本田技研工業株式会社を経て現在に至る。

2021年4月より学術研究員として佐藤研究室に着任いたしました。

2011年の東日本大震災から10年という節目の年に仙台に戻り、研究開発に従事することは、震災直後から宮城県を中心にボランティア活動を継続してきた身として非常に感慨深いものがあります。

佐藤研究室においては、メインの研究テーマであるレーダ関連技術の研究開発を推進しつつ、cmオーダでの位置計測が可能な高精度衛星測位技術と組み合わせたレーダ技術の開発に取り組みます。

レーダ計測技術と衛星測位技術の組み合わせは非常に相性が良く、レーダ計測における測線の設定や、計測データの位置決めといった重要なプロセスの自動化・効率化と高精度化の両立を図ることができます。

さらに衛星測位ベースの自動走行技術を組み合わせることにより、計測時のレーダ位置および速度を制御することで、従来のマニュアル操作では困難だった再現性の高いデータ取得が期待できます。

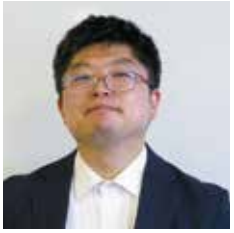
研究室で開発するこれらの技術について、国内・海外、適用分野を問わず幅広いフィールドでの実地検証を踏まえながら、まずは宮城県・山形県に主として社会実装を並行して推進してきたいと考えています。

まだ着任して間もないですが、東北アジア研究センターに所属される研究者・学生が取り組まれている多様な研究内容についても大変興味があります。

気軽な情報交換の機会が設けづらい昨今ですが、パンデミック収束後はぜひ地域研究に携わる皆様と情報を共有したい次第です。

#3

「東北」の人びとの行動・思想を探る



鈴木淳世

上廣歴史資料学研究部門／学術研究員

すずき・よしとき▶岩手県出身。一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。博士（社会学）。一橋大学大学院社会学研究科特任講師などを経て現職に至る。

2021年4月より、東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門の学術研究員として着任しました、鈴木淳世と申します。専門は、日本近世史・思想史です。

「東北」では近世から凶作・飢饉などの災害が頻発しており、災害時には大量の死傷者が発生していました。そのうえ、近代以降は工業化も遅れ、次第に「東北」は後進地域と位置づけられていきました。結果、「東北」には「貧困」などの負のイメージが付与され、実際とは異なる「暗く変化に乏しい」地域と見なされるようになっていきました。さらに、これまでの歴史学研究では、「東北」の豪農・豪商は隷属農民・貧農層を抑圧し、「貧困」を助長していたとされ、結果的に暗く平板な「東北」のイメージを補強するものとして位置づけられてきました。しかし、実際に史料調査を進めていきますと、17世紀初頭の商業出版の成立を背景にして「東北」の豪農・豪商も様々な書物を読み、考え、行動していたことが判明し、従来のイメージとは異なる側面が明らかとなってきました。そこで、私は19世紀の八戸藩地域をフィールドにして豪農・豪商の思想形成（蔵書形成・書物受容）を詳しく検討し、彼らの多様性を示してきました。そして、同時に彼らの立場性の相違が書物流通の偏りによって生じてくる過程を考察しました。

今後は、大名家当主や在村医師なども分析対象にし、当該地域の人びとの行動を規定していたものを、より詳しく検討したいと考えています。あわせて、19世紀の「東北」の主要な産業である鉱山の動向もふくめて、社会・文化の特質を明らかにしていきたいと思っているところです。どうぞよろしくお願いいたします。

BOOKS
著書・論文紹介

大陸と日本をつなぐ自然史

鹿野秀一、平野直人、千葉聡 著　古今書院　2021 年 1 月刊　　text: 平野直人

生態系や生息環境は、様々な時間スケールで移り変わる自然環境のなかで、多様に変化し、進化する。2000万年の時間スケールで日本列島は大陸と切り離されたが、数万年の時間スケールで発生した氷期には、日本列島は再び大陸と地続きになっている。この変化を基盤として、動植物の流入や交雑、生態系の変化が発生したことは想像に容易い。本書全編通し、地殻変動観測、岩石と生物の化学分析、DNA 解析といったデータから読み取れる自然界の現象を、日本列島と大陸で対照させながら読み進めることができる。流出河川が無く塩分濃度が多様な内陸湖の中で進化をたどるチャニー湖沼群は、その独特の生態系が興味深い。また、本書が日本列島と大陸の地殻変動と進化のトピックに始まり、カタツムリDNA解析で期待される日本列島と大陸両者の進化過程に関わるトピックで締めくくられている点は大変興味深い。

近世旗本領主支配と家臣団

野本禎司 著　吉川弘文館　2021 年 2 月刊　　text: 野本禎司

本書は、近世日本において徳川将軍家の直臣（直属の武士）として江戸幕府の軍事・行政を支えた旗本家の存立構造を解明したものである。当時の政治体制は封建制度によって理解されているが、江戸時代の領主は、知行地を支配するだけでなく、旗本家であれば幕府役職に就任、その職務を果たす必要があった。従来の研究では、この両側面を別々に追究してきたが、本書ではこれを統一的にとらえる「近世領主」という概念を用いることで、旗本領主の存立構造の実態を解明し、その特徴を捉えることを目的とした。具体的には幕府による過度の知行保障や家臣の流動性、知行地支配における中間支配機構への依存などである。本書の研究視角は、武士が統治した近世日本の統治構造の特質解明につながるものと考えており、また同時期における東アジア世界の統治体制の比較の中でご覧いただけるならば幸いである。

連続性への希求 – 族譜を通じてみた「家族」の歴史人類学

瀬川昌久 著　風響社　2021 年 2 月刊　　text: 瀬川昌久

本書は、香港新界の一宗族の詳細な系譜記録である族譜を精密に読み解くことにより、前近代中国の家族生活を再現し、その背後に横たわる親族規範を解明しようとした歴史人類学的な研究成果である。従来、族譜は死者の名前や系譜情報のみを羅列した無味乾燥な文書であり、そこから過去の家族の実体を明らかにすることは不可能だと思われてきた。本書は、文化人類学的な親族関係の分析手法を駆使することにより、族譜から抽出された家族形態、養子、祖先祭祀の委託、寡婦、再婚、側室保有などのデータを詳細に分析し、前近代中国の家族のあり方や超世代的に継承されるべきと考えられていた価値に関する意識を明らかにした。なお、本書は本センターの助成のもと、東北アジア研究専書の一冊として刊行された。

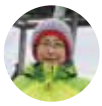
出羽国の庶民剣士－武田軍太「武元流剣術実録」の世界－

平川新 著　東北大学東北アジア研究センター（叢書第68号）　2021年3月刊　　text: 荒武賢一朗

江戸時代の歴史について、これまで多くの研究を発信してきた平川新氏（東北大学名誉教授）は、今回「庶民剣士」の記録に注目し、本書でその成果をまとめている。平川氏は、現在の山形県高畠町で剣術の道場主であった武田軍太（1773～1849年）の自伝「武元流剣術実録」を丹念に分析し、剣士たちの実像を見事に再現している。軍太の「本職」は農業であるが、祖父・父からの道場を継承し、自らの腕も磨いた。門人は500人を数え、近隣の百姓のみならず、高畠・米沢・仙台の武士たちも含まれる。さらに、1820年には高畠藩の剣術師範となり、その後「武元流」を創始した。一般的には、「剣術は武士のもの」という江戸時代の捉え方がある。しかし、本書が教えてくれるのは「武士よりも優れた庶民剣士が多く存在し、農民が道場を開いていた」という画期的な史実であった。江戸時代の身分制や社会を見直す貴重な成果といえよう。

共同研究の紹介

カムチャッカ先住民の言語とライフヒストリーの資料の刊行



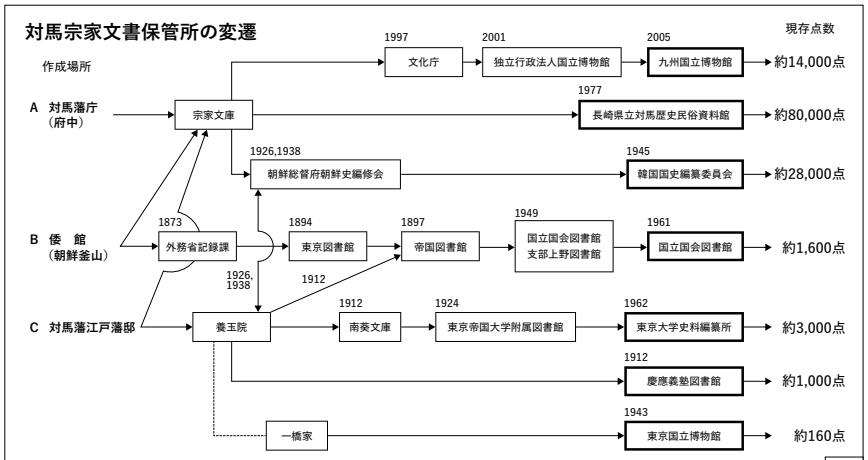
永山ゆかり　釧路公立大学／准教授、本センター共同研究員

東北アジア研究センター報告27号（2021年3月刊）として永山ゆかり・エフドキヤ・プローニナ編『ЯЗЫК И ЖИЗНЬ НАРОДОВ КАМЧАТКИ: ЛИЧНЫЕ ИСТОРИИ И ВОСПОМИНАНИЯ』が刊行された。共同研究「北極域社会における人間の安全保障に関する方法の探究」の成果の一部である。ユーラシア大陸北東部に位置するカムチャツカ半島にはおよそ3万人の先住民族が居住する。本書はそのうちコリヤーク語およびアリュートル語の母語話者によって語られた、あるいは母語話者が執筆した自伝をまとめたものである。1920年代には先住民言語の正書法が整備され、ヨーロッパロシアから教師が派遣されて学校教育がおこなわれた。1950年代から徐々に村の統廃合が進むにつれ、子供たちは故郷の村から遠く離れた寄宿学校で生活するようになり、言語や文化継承の機会は著しく阻害された。本書では1920年代にレニングラード（現サンクトペテルブルク）から派遣されたロシア人教師に実際に会った女性から、ソ連末期に教育を受けた女性まで10名のライフヒストリーを収録した。全員が進学や就職にあわせて別の村への移住を余儀なくされ、そのうち7名は生まれた村が廃村となった。ソ連時代にカムチャッカ先住民の子供たちがどのように暮らしてきたのか、体系的な調査は行われておらず、生活変容の実態解明のための貴重な資料となる。本書の大部分はロシア語だが、日本語の読者のためにすべての資料に和訳をつけた。東北大学機関リポジトリで全文ダウンロードができる。

住居模型とナジェジダ・ヘロル氏（2000年、パラナ）

感染症時代の東アジア国際関係史研究

程永超
（日本・朝鮮半島研究分野／准教授）



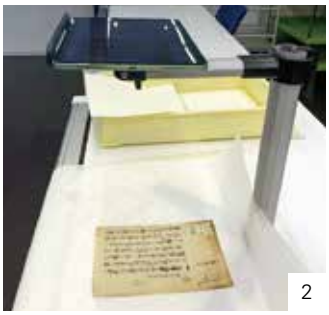
田代和生「国立国会図書館所蔵「宗家文書」目録」（『参考書誌研究』76、2015年）5頁より転載。

1

筆者は17～19世紀東アジア国際関係史を研究しており、通常は東アジア各国に行って現地調査や史料収集を行っている。感染症拡大のなか、筆者がどのように研究活動を行っているかを紹介したい。

江戸時代の日朝関係と言えば、対馬府中藩（以下、対馬藩）を抜きには語れない。それは、対馬藩が日本と朝鮮との間での交渉実務と貿易実務を委ねられていたからである。対馬藩では、外交の判断資料となる交渉記録が作成され、それが先例として踏襲されて、膨大な対馬宗家文書が形成された。この対馬宗家文書は日朝関係史や東アジア国際関係史の第一級の基本史料である。現存する宗家文書は12万点を超えており、日本と韓国の7か所に分割保管されている（図1）。この7か所のうち、大韓民国国史編纂委員会に所蔵される文書の大部分は、日朝交渉に関係する内容を持つ。筆者は2018年から2019年に韓国に長期滞在したおかげで、この韓国所蔵分を数多く収集できた。海外渡航が難しい現在、筆者は対馬に所蔵される宗家文書（約8万点）をメインに調査している。

対馬歴史民俗資料館は2017年3月末に休館し、リニューアルして、令和4年4月末頃に対馬市立博物館として開館する予定である。それに先立ち、長崎県対馬歴史研究センターは今年の4月から予約制による資料閲覧を開始した。そのほか、九州国立博物館所蔵分が翻刻され、「対馬宗家文書の世界」（https://collection.kyuhaku.jp/souke/database/public/）で公開されている。また、



2

現時点では、東大所蔵分の多くは東大史料編纂所HP、慶應所蔵分の一部は慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション、国立国会図書館所蔵分の多くは国立国会図書館デジタルコレクション、東京国立博物館所蔵分の一部は東博の国際交流史料データベース、韓国所蔵分の書契類は国史編纂委員会HPにて画像を閲覧できる。このように、閲覧に不便だった対馬宗家文書は徐々にオープンアクセス化され、世界中の研究者たちに活用されるようになった。

韓国の史資料のデジタル化が日本よりはるかに早く始まったおかげで、朝鮮王朝史の基本史料は容易くオンラインでアクセスできる。筆者がよく利用するのは、韓国国史編纂委員会のウェブサイトにある、おそらくオンラインDBでは最大のものである韓国史DB（http://db.history.go.kr）、日朝・中朝の交渉に関わる公文書を謄写した謄録類などを多く所蔵するソウル大学校奎章閣HP、および韓国学中央研究院HPである。筆者はこうした史資料のデジタルアーカイブ化の恩恵に与っている。

各地に分散して保管される宗家文書に依拠して対馬藩の活動を復元するうえで、それらを韓国側史料と照らし合わせて史実を究明することが、近世日朝関係史・東アジア国際関係史研究者の共通課題である。筆者にとって、歴史研究はジグソーパズルを組み立てることである。7か所に分散して保管される宗家文書と韓国・中国側史料から、関係するピースをピックアップし、歴史的事実を復元することが筆者の最大の楽しみである。

1：対馬宗家文書保管所の変遷
2：長崎県対馬歴史研究センターでの史料調査

編集後記

昨年末トルコが、対立していたはずのロシアから突然ミサイル防衛システムを導入してNATOを揺るがし、米国の制裁を受けた。米大統領はさる4月、100年以上前のオスマン帝国によるアルメニア人のジェノサイドを公式に認める声明を出し、ロシアに切り捨てられたアルメニアに接近を図っている。私たちがコロナ禍で動けない間も、東欧は緊張を高めている。（柳田賢二）

CNEAS
Center for Northeast Asian Studies

東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第89号

2021年6月29日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会
発行：東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009　FAX 022-795-6010

Facebookをチェック!

ISSN 1344-9095